駿の時に至りて其將沙州刺史楊宣をして西域を經營せしめ、龍熙と戰ひて焉耆を降せしこと見ゆればなり。

即ち此文書は張駿の部下西域長史李柏より時の焉耆王龍熙に送りし書牘の草稿なるべし。

次に研究すべきは此文書の時代なりとす。こゝに見ゆる五月七日は、之を何年に當つべきか。是亦至難の問題にして、到底的確に指示する能はずと雖、試に少しく論述する所あるべし。

書中「別來〇〇恒不去心」と云ひ、また別の一葉に「闊久不知問常云々」の字句の存するよりして考ふれば、兩者もとより相識の間にして、從つて焉耆が駿に降附してより後の事實ならんと想像せらるゝと共に、其文の書き方、殊に斷片に見ゆる「臣柏言焉耆王龍熙」等の文字よりすれば、何人も其隷屬の君主に送れるものと認むるを否まざるべし。而して焉耆の降伏は晉書によりては精確に其年次を知る可らず。通鑑及び十六國春秋には之を咸興元年（西紀三百三十五年）に配して、晉書張駿傳及び焉耆傳の記事を殆んど其儘に記せり。されど晉書石勒載記を見れば、駿が咸和五年（西紀二百三十年）勒に藩を稱して、後の或年に、「張駿遣長史馬詵、奉圖送高昌于寘鄯善大宛使、献其方物」と記せり。これ此等の使の駿に來れるものを、更に勒に致せるに外ならず、而して勒の死は咸和七年なるを以て、此事は五年以後七年に至る中の一年なりとす。此等鄯善、于寘、大宛等の使が駿に至れるは、もとより焉耆と同時に楊宣西征の結果に外ならざるは、晉書によりて明らかなるが故に、獨り焉耆のみを數年隔つる咸興元年に降附せりとする理由の存するなし。而してまた晉書の記載を以てすれば、咸和五年より更に二三年以前に遡るものなるべし。更に一の斷片の示す所によれば、「逆賊趙」なる文字あり、これまさに前記叛將趙貞に相するものにして、同傳中なほ「初戊己校尉趙貞不附于駿、至是駿擊擒之、以其地爲高昌郡」と記せり。則ち先に李柏が一度征して克つ能はざ